

〈実体認識の発展の型〉について

三 浦 陽 一 *

はじめに

日本で流布している「5 文型」論は, Onions と Hornby の「動詞型」論をうけた斎藤秀三郎『実用英文典』(1898-1899) 以来確立したものであるが, there is 構文をどう位置づけるかがあいまいであるなどの問題がある。

* 「5 文型」の成立経緯については, 安井稔『英語教育の中の英語学』大修館書店, 1973 年, 170 頁以下。井村元道『日本の英語教育 200 年』大修館書店, 2003 年, 25, 30, 114 頁。なお, 生成文法の観点から学校文法の「5 文型」の問題点を指摘したものに, 伊藤英彦「5 文型を再考する」『関東学院大学経済学部教養学会』46 号, 2009 年 1 月がある。

そこで, 「5 文型」論の欠陥を補うものとして, 義務的副詞句のパターンをふたつ加えた Quirk らの「7 文型」論があり, これに「2 項形容詞」タイプを追加した安藤貞雄の「8 文型」論もある。(安藤貞雄『現代英文法講義』開拓社, 2005 年, 安藤貞雄『英語の文型』開拓社, 2008 年)

他方で, 「透明なひとつの文型」(He/put/a glass/on the table.) しか認めないベーシック・イングリッシュの「1 文型論」もあれば(相沢桂子『850 語に魅せられた天才オグデン』北星堂, 2007 年, 158-161 頁), Palmer の「27 動詞型」もあり, 近年では Susan Hunston, *Verbs: Patterns and Practice*, Collins COBUILD, 1997 が採用する「100 動詞型」もある。

一般に, 前置詞句と副詞句を区別するなど, 語彙レベルを基準にすれば文型の数は多くなり, 補語や目的語など, 文中での機能を基準にすれば文型の数は少なくなる。

こうした議論に共通するのは, 文に表れた語どうしを直接結びつけ, なんらかの基準で分

* 人文学部教授—現代史

類する，という発想に立っていることである。

しかし，そもそも表現の背後には，話者の認識がある。ほんらい，文型について考えるときも，表面にあらわれた語だけを見て分類するのではなく，背後にある認識の型を知れば，多様な表現を根源から把握できるはずである。

本稿は，人間の認識の構造と英語における〈認識の型〉を探る試みである。

Ⅰ 対象と認識の普遍的構造：〈実体とその三態〉

人間の認識は，対象を〈実体〉として対象化し，その実体がもつ三つの〈態〉を認識することで発展する。

〈実体〉と，それがもつ〈動態〉〈状態〉〈様態〉の関連を，図1に示した。

◇実体

人間は，対象を〈実体〉として認識する。

〈実体〉とは，動態・状態・様態の三態を担いうる基体(まとまり)としてとらえた対象である。

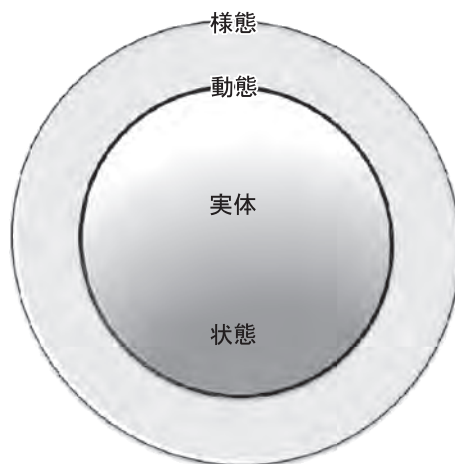


図1 実体とその三態

〈実体 substance〉とは、「さまざまに変化してゆく物の根底にある持続的なもの、そうした変化によって様態を変えながらも同一にとどまり、つぎつぎに現れる諸性質の担い手として考えられるもの」である（栗田・古在編『岩波小辞典哲学』岩波書店、1958年、83頁）。「実体」をどう理解するかが、哲学や宗教の主要テーマであるといってもよい。

実体認識の基盤は、人間の身体や外界の实在物のあり方にあるが、人間の实体認識は、身体性や实在性を超えて飛躍していく。たとえば、〈ドラえもん〉は、猫という实在物を基盤に、作者が観念的につくりあげ、読者が支持することによって生命力を得た〈実体〉である。

認識のまとまりの表現である〈文〉や、文の集合である〈文章〉も、〈まとまり〉である以上、実体性をもつ。

〈実体〉は、対象を概念としてとらえて言語で表現するための出発点となる対象認識である。

実体認識を概念化し、語彙化したものは、「名詞」と呼ばれる。

※ 概念 concept とは、雑多な認識を洗練して、事物やその過程の本質的諸特徴を反映した思考の形式であり、人間の思考活動の基本的単位である。人間は概念を用いて、無限に存在する具体的な事物やその過程の本質的特徴をとらえて表現し、一般的なことがらを考えることができるし、法則を発見することもできる。概念は言語とともに生まれ、言語で表現される。（森宏一編『新装版 哲学辞典』青木書店、1996年、50頁）

◇動態

〈実体〉は、〈動態〉をもつ。

動態（起こり）の認識は、認識の対象たる実体が「動く」ことで可能になる（じっさい、すべての実体は変動している）が、たとえ実体の動きが見えなくても、人間は記憶と五感を働かせつつ、自分の身体を移動・運動させたり、まぶたによる瞬（まばた）きと眼球運動によって視界を転換することで、〈動態〉を認識する。

人間は両目が顔の前面にあるため、両眼視による立体的認識能力→動態認知力が発達している。しかも眼球は一点を凝視するときも微動をくりかえしており、そのおかげで人間は対象を立体的な「起こり」として知覚できる（固視微動）。

図1は、〈動態〉の認識によって、人間が実体に「起こり」という輪郭を与えることを表

している。

動態の認識を概念化し、語彙化したものは、「動詞」と呼ばれる。

◇状態

実体には、リンゴが「赤い」、熱が「高い」、人が「賢い」というような、〈実体〉に内属する性質もふくまれている。実体に内属する性質を、ここでは〈状態〉と呼ぶ。

〈動態〉は、実体の〈輪郭の動き〉によって認識を発展させる。それに対して〈状態〉は、〈実体の中のありさま〉を通して認識を発展させる。

図1は、実体内部の性質たる〈状態〉を、網かけによる〈かげり〉として表現している。

状態の認識を概念化し、語彙化したものは、「形容詞」と呼ばれる。

◇様態

〈様態〉は、実体の動態・状態・様態に密着した外側の認識である。

〈様態〉の認識は、実体をめぐる間接的な認識である。

図1は、実体を間接的にとりまく〈様態〉を、外側の円として表現している。

様態の認識を概念化し、語彙化したものは、「副詞」と呼ばれる。

〈動態〉→〈状態〉→〈様態〉は、この順に実体から遠くなり、それじたいの実体性も希薄になっていく。

実体と態の序列構造

対象を実体として対象化することから、人間は認識を深めはじめる。人間は、実物から空想まで、あらゆるものを実体として認識できる。

実体は、〈動態〉〈状態〉〈様態〉の三態をもつが、逆に三態が認識されることから帰納的

に実体の存在が推認されることもある。

たとえば、ある物質には電流が流れ、他の物質では流れないといった〈電気現象〉が観察される。こうした電気現象を担う実体として、〈電荷〉という概念がつくられた。さらにこの〈電荷〉を担う実体が探求され、〈イオン〉という概念へと発展した。

こうなると、認識の流れを逆にして、イオンの動態・状態が電荷であり、電荷の動態・状態が電気現象である、という順序で思考することが可能になった。

最近確認されたヒッグス粒子 Higgs boson は、他の粒子（実体）のあり方（三態）から予測されていた仮想的「実体」であったが、実験によって、いまや実在する「実体」へと認識が変化した例である。今後、人間の物質認識は「ヒッグス粒子」という実体認識を足場にして、さらに発展していくであろう。

より日常的な例では、「飛ぶ」「速い」「空中で」といった三態の認識から、われわれはジェット機がもつ実体性（実体としての内容）を認知する。そして、その内容をくりかえし認識することで、われわれのジェット機についての認識はいつそう発展していく。

※ われわれは、「飛ぶ」「速い」「空中で」という三態を、「飛行」「速度」「大気」としてそれぞれ実体化することもできる。

対象は実体として認識され、実体は三態をもつ。

〈実体の三態〉として対象を解析することは、人間が認識を発展させる普遍的な過程である。

II 実体認識の過程と構造

実体は、〈存在し、変化し、定着する〉という三つの相をもつ。

※ 「相 そう」とは、たとえば「投球」というひとつのものごとが、「かまえて」「ふりかぶって」「ボールを離す」というように、その内部でもつ段階的な違いをいう。

実体の三相は、〈始まり、移り行き、行き着く〉という、ものごとの普遍的なあり方である。

〈存在〉〈変化〉〈定着〉は、実体がもつ時間的（通時的）な三つの相であり、〈動態〉〈状態〉〈様態〉は、ある相にある実体もつ空間的（共時的）な三つの態である。

以下では、英語において、実体の相が、態を媒介にして認識される〈認識の型〉を見ていく。

英語における〈認識の型〉の相互関係をまとめたものが、図2である。

図2の一番下の実体の〈存在〉の相においては、英語では〈外性・出現・知覚〉の三つの型で認識する。〈存在〉の相の認識を表す代表的な動態詞（「動詞」）は、beである。

次に、実体の〈変化〉の相においては、英語では〈自動・他動・使役〉の三つの型で認識する。〈変化〉の相の認識を表す代表的な動態詞（「動詞」）は、doである。

そして、実体の〈定着〉の相においては、英語では〈内性・保持・授与〉の三つの型で認識する。〈定着〉の相の認識を表す代表的な動態詞（「動詞」）は、haveである。

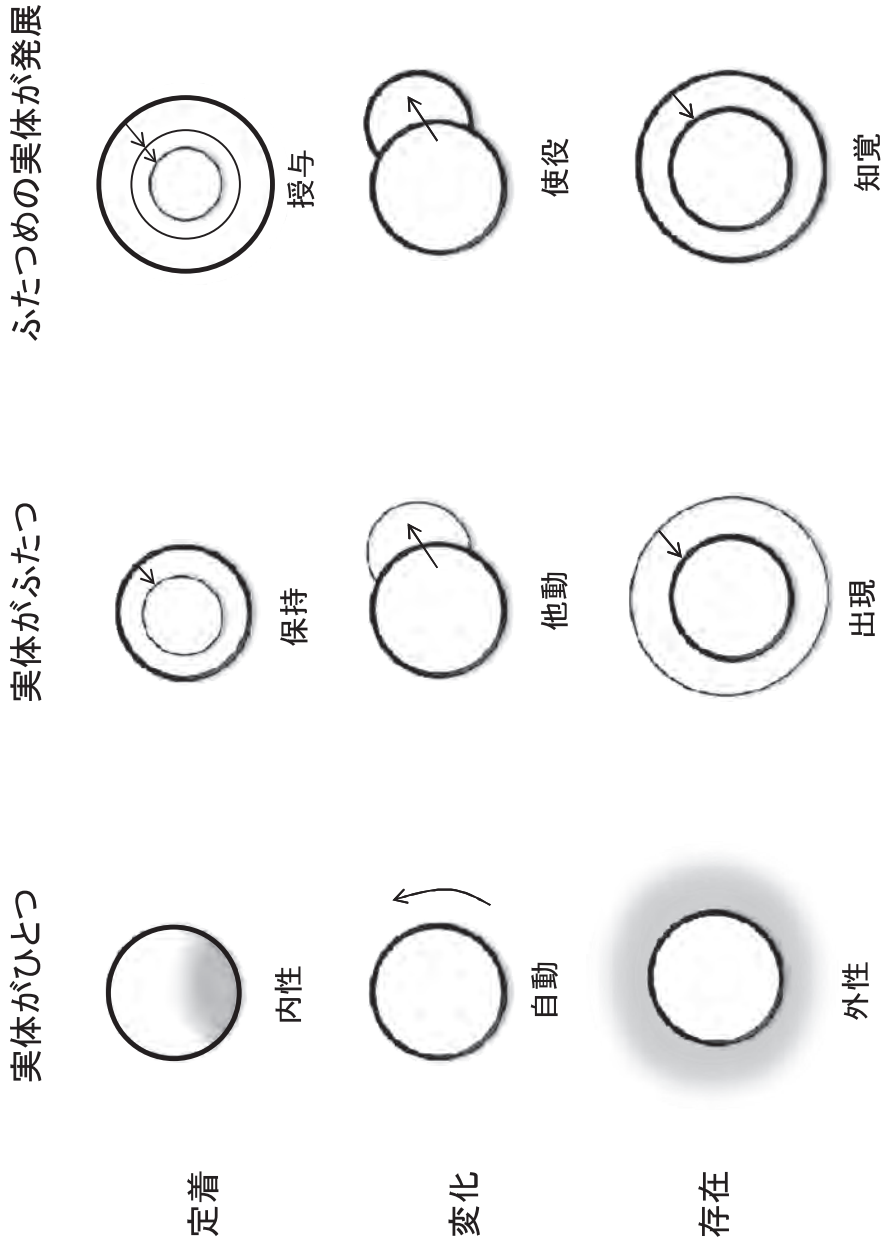
図2において、〈外性・出現・知覚〉〈自動・他動・使役〉〈内性・保持・授与〉の区別は、○実体がひとつだけ、○実体がふたつある、○ふたつめの実体がさらに態を発展させている、という実体のあり方の違いによる三分である。

英語の〈認識の型〉とは、〈存在・変化・定着〉という実体の三つの相を、合計九つの型（〈外性・出現・知覚〉〈自動・他動・使役〉〈内性・保持・授与〉）において認識するものである。

実体認識の九つの型は、それぞれ代表的な表現形態をもち、相互に連結もできる。

この九つの型は、それぞれ代表的な動態（動詞）をもつ。英語におびただしく存在する動態詞（「動詞」）は、それぞれの語義が実体認識の九つの型のどれに適合するかを基準に分類できる。

以下、図2を順に説明していく。



九つの図はそれぞれの型の代表例。矢印（→）は認識の発展の方向。太い円（○）は、動態の認識を表し、細い円（○）は、動態以外の認識を表す。

図2 実体認識の発展の型

①存在

a. 外性

外性の前提たる「存在」は、〈客観的に実在する〉という動態であり、英語では be で表す。

I think, therefore I *am*. (われ思う、ゆえにわれあり)

God *is*. (神は存在する)

“I” や “God” だけでなく、〈文〉もまた、いったん表現された以上、この世に存在する客観的な実体である。〈文という実体〉がもつ様態を、ここでは〈外性〉と呼ぶ。文は、常に外性をもちうる。

〈実体の存在を表す文〉をひとつの実体とみなし、これに外性を加える認識の型が多く用いられる。

〈実体の存在を表す文〉がもつ外性の典型は、場所である。

Taro is *in the forest*. ...〈実体の存在を表す文〉Taro is. に、外性 *in the forest* (場所) を加えている。



Taro is in the forest.

図3 外性

※ be は〈実体の存在〉を表す（動態詞。There *is* a boy.）。また、be は話者による〈判断の存在〉も表す（判断詞。He *is* not a fool.）。上記の Taro *is* in the forest. の *is* は、〈実体の存在〉の認識と〈判断の存在〉を兼ねた表現である。肯定の判断は、認識はあるが表現がない〈ゼロ表現〉が表している。

同様に、do は〈実体の変化〉を表す（動態詞。He *did* say so.）。また、do は話者の〈判断の存在〉も表す（判断詞。He *did* not go there.）。do は、文中では〈実体の変化〉の認識と〈判断の存在〉の両方を表す。たとえば、*Did* he say so? における *did* は〈実体の変化〉と、〈判断の存在〉を表す。疑問の判断は、“Did he” という語順が表している。

文頭に副詞、文尾に前置詞句を用いる外性表現もよく用いられる。

Merrily, he walked. ... 副詞 *Merrily* が、文 He walked. 全体の外性となっている。

He went *on a picnic*. ... 自動（後述）の文 He went. に、外性 *on a picnic* を加えている。

He is afraid *of snakes*. ... 内性（後述）の文 He is afraid. に、外性 *of snakes* を加えている。意味上、この外性 *of snakes* は必須である。

文の外性に、移行動相詞 *to*～や、生成動相詞～*ing* も用いることもできる。

Jane is easy *to please*. ... 内性の文 Jane is easy. に、外性 *to please* を加えている。移行動相詞 *to please* は、*please*（気に入る）という動態までに移行の相があることを表し、Jane については、その移行は容易である *is easy* というのが原意。文意は、「ジェーンは喜ばせやすい人だ」。

He went *out to see Jane*. ... 自動の文 He went. に、「副詞的小辞」*out* で外性を加えたあと、移行動相詞 *to see Jane* によってさらに外性（目的）を加重している。*to see Jane* における *to* は、He went *out* から *see Jane* に至るまでに、移動する時間など、移行の相があることを表す。

He sat on the grass, *looking at the setting sun*. ... 自動の文 He sat. に外性 *on the grass* を加えてひとつの文とし、この文全体に、さらに生成動相詞句 *looking at the setting sun* による外性を加えている（いわゆる「分詞構文」）。*looking at the setting sun* は、自動の生成動相詞 *looking* に外性 *at the setting sun* を加えたもの。

英語では、*on*, *in*, *out*, *up*, *down*, など、前置詞と同形の「副詞的小辞」によって、文の外性を表す慣用的な表現が発達している。

Taro walks *on*. ... 自動の文 Taro walks. に、外性 *on*（継続の様態）をかぶせてコンパクトな表現にしている。（文意は、「太郎は歩きつづける」）

He cooled *down*. ... 自動の文 He cooled. に、外性 *down*（下方への移動）をかぶせて、ニュアンスのある簡潔な文にしている（文意は、「彼は整理運動をした」）。

※ 文だけでなく、〈動態〉〈状態〉〈様態〉も、希薄ながら実体性を帯びた存在である以上、外性をもちうる。その場合は、これらに直接付加する。Taro talks *fast*. (*fast* は、〈動態〉 talks の外性) He is *pretty* tall. (*pretty* は、〈状態〉 tall の外性) He sings a song *very* slowly. (*very* は、〈様態〉 slowly の外性)。

b. 出現

「出現」は、〈話し手にとって特定の場所〉に、〈もうひとつの実体〉が現れることである。出現は、存在の一種である。

英語では、出現は〈there is 文〉で表現する。

There was a fairy in the forest. ... 話者から見た〈特定の場所 there〉に、〈ある実体〉a fairy（妖精）が存在→出現 *is* している。in the forest は、there が表現不足であるための再言である。



図4 出現

※ 〈there is 文〉における there は、話し手から見て〈遠い場所〉を特定する呼詞（「代名詞」）である。

なお、〈there is 文〉のほかに、頻度は低いが〈here is 文〉もある。*Here is your notebook.*（あなたのノートがここにありますよ）here は、話し手がふくまれた〈近い場所〉を特定する呼詞（「代名詞」）であり、here に〈もうひとつの実体〉が出現していることを聞き手に呼びかけるニュアンスである。

※ 〈there is 文〉は、主語（認識のテーマとなる実体）の前に there が先立つという特殊な語順をとるため、その「生成」のロジックをどう説明するかが議論されている（中村捷・金子義明編『英語の主要構文』研究社、2002 年、81 頁以下。安藤貞雄『英語の文型』開拓社、2008 年、171 頁以下）。本稿では、〈there is 文〉とは、〈話者が特定した場所 there に実体が出現する〉という、図 4 のように外側から内側に向かう自然な認識の順序に従って表現したものと解する。また、〈there is 文〉では〈実体〉に不定冠詞 a がよく使われるが（*There is a book on the table.*）、定冠詞 the が使われる場合もあり（*There is the record of the past three years.*）、これをどう説明するかについても定説がない（足立公也・都築雅子編著『学校文法の語らなかった英語構文』勁草書房、2010 年、8 頁以下）。この問題の解決は、there が呼詞すなわち話し手から遠い、ある特定の場所をいうだけの空虚な語であることに求められる。空虚な場所 there に出現する〈ある実体〉は、不特定の实体（a ～）から特定の实体（the ～）まで、広くふくみうる。

〈there is 文〉では、be の替わりに、come, arise, enter, exist, follow, happen, live, remain, stand, take place などを使って、実体の出現のさいの動態の違いを表現できる。

There came a young boy. ... be の替わりに came を用いて、話者にとって特定の場所 there に、a young boy が「やって来た」という出現の動態を表す。

There followed a confusion. ... be の替わりに followed を用いて、話者にとって特定の場所 there に、a confusion が「後続した」という出現の動態を表す。

There is no～ing は、話者が特定した〈その場所 there〉には、〈実体〉～ing（いわゆる動名詞）がありえない no ことを言う表現である。

There is no telling what will happen in the forest. ... 話者が特定した〈その場所 there〉には、telling what will happen がありえない→不可能である no、という表現。in the forest は、there が表現不足であるための再言。

“No parking” “No smoking” のような掲示は、“*There is no parking.*” “*There is no smoking.*” からきた表現で、掲示した主体（場所の管理者）にとって、その場所 there では parking, smoking がありえない→禁止する（no）ということを述べている。

c. 知覚

「知覚」は、〈実体〉の知覚の中にある〈もうひとつの実体〉が、ある態にあるという認識である。知覚は、存在の認識の発展である。

英語では、知覚を表現する典型的な動詞は、see, hear, listen to, watch, feel, smell, taste, feel, find, catchなどで、「知覚動詞」と呼ばれる。

〈もうひとつの実体〉が自動（後述）または他動（後述）の動態にあるのを知覚するのが、知覚の典型的な認識の型である。〈もうひとつの実体〉の〈動態〉は無規定動相詞（「to なし不定詞」）にする。

We see the fairy *dance*. ... 〈実体〉we の知覚 see の中に、〈もうひとつの実体〉the fairy があり、この the fairy が *dance* という自動をもつ。(図 5)

Taro hears someone *call his name*. ... 〈実体〉Taro の知覚 hears の中に、〈もうひとつの実体〉someone があり、この someone が *call his name* という他動をもつ。

〈もうひとつの実体〉が、ある内性（後述）をもつことを知覚する場合もある。

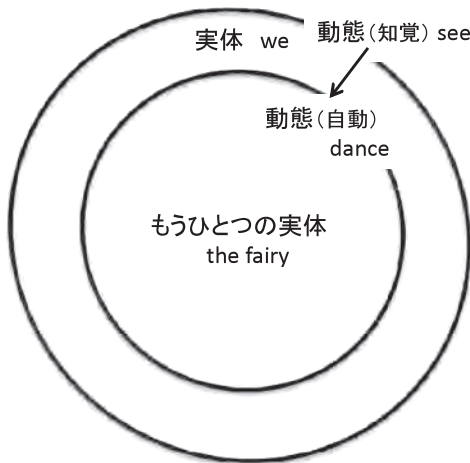
Taro finds the fairy *funny*. ... 〈実体〉Taro の知覚 finds の中に、〈もうひとつの実体〉the fairy があり、この the fairy が *funny* という内性をもつ。(図 6)

内性には、動きのニュアンスをもつ動相詞（～ing, ～en）も使える。

The fairy catches him *smiling*. ... 〈実体〉the fairy は、〈もうひとつの実体〉him が、生成相にある内性 *smiling* をもつのを目撃 catches している。

Taro hears the drum *beaten*. ... 〈実体〉Taro は、〈もうひとつの実体〉the drum が、完成相にある内性 *beaten* をもつのを聞いている hears。

※ 実体を知覚する〈もうひとつの実体〉がもつ態は、不要なら表現しない。The fairy saw him. これは、後述する他動と形式は同じであるが、知覚は、〈もうひとつの実体〉を他動させるのではなく、存在を知覚するだけであるところが異なる。



We see the fairy dance.

図 5 知覚



Taro finds the fairy funny.

図 6 知覚（内性型）

②変化

a. 自動

実体の輪郭の動きを媒介にして、われわれは実体の変化を認識する。自動は、実体が自分自身を動かしているという認識であり、変化の一種である。

自動を表す動詞を、「自動詞」と呼ぶ。

Taro dances. ... 自動詞 dances は、〈実体〉Taro の輪郭の動きである。

自動は、外性をもつことがある（既述）。

Taro dances in the forest. ... 〈自動〉Taro dances. は、外性（場所）in the forest をもつ。（図 7）

自動は、内性（後述）をもつこともある。

Taro thinks different. ... 〈自動〉(Taro thinks. 実体の観念的な動き)が、内性 different をもつ（文意は、「太郎は他人と発想が違う」）。



Taro dances in the forest.

図 7 自動

The fairy wanted to rest *easy*. ... 自動 The fairy wanted to rest. が, 内性 *easy* をもつ(文意は,「妖精は安心してくつろぎたいと思った」)。この文は, 内性の文 The fairy is *easy*. の *is* を *rest* に替え, さらに判断の相 *wanted to* を加えたものという説明も可能である。

※ 文型論では, *want to*, *need to*, *would like to*, *seem to*, *look to*, *appear to*, *be willing to*, *be able to* のような表現をどう位置づけるかが問題になる。こうした表現は, 主語たる実体についての話者の(主語の, ではない)判断の客観的な相を表す。たとえば, She *wanted to be with him*. では, *to be with him* が *want* の「目的語」ではなく, *want to* じたい, 主語の動態についての, 話者による客観的判断の微細な相を表すものであって, 文型のちがいににかかわるものではない。

b. 他動

〈実体〉は, その動態によって, その外にある〈もうひとつの実体〉を自分に結びつける。他動は, 実体が他の実体を媒介にして運動しているという認識であり, 変化の一種である。

他動を表現する動詞は, 「他動詞」と呼ばれる。

The fairy *kisses Taro*. ... 〈実体〉the fairy が, 他動 *kisses* によって, その外の〈もうひとつの実体〉Taro を自分と結びつけている。(図8)

他動を受ける〈もうひとつの実体〉に, 文を用いることができる。そのさい, 話者から遠いものを特定する呼詞(「代名詞」) *that* で〈もうひとつの実体〉を短く指定し, さらに文に

よって再言する形式をとる。(略式では that を省略する)

Taro said [that] he wanted to be famous. ... 〈実体〉Taro が、他動 said によって、〈もうひとつの実体〉[that] を自分に結びつけ、つづいて文 he wanted to be famous. によって that の内容を再言している。

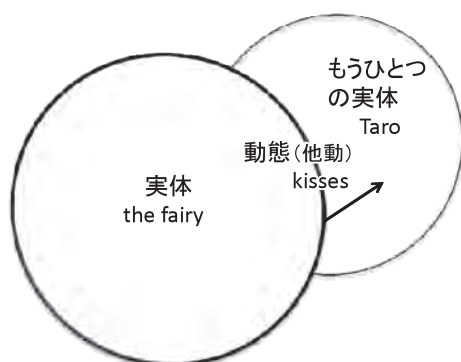
他動の結果として、〈もうひとつの実体〉に内性（後述）が発生することがある。

The fairy makes him happy. ... 〈実体〉the fairy が他動 make によって結びつけた 〈もうひとつの実体〉him があり、その him に内性 happy が発生する。(図9)

They elected [made, chose] him chairman. ... 〈実体〉They が、他動 elect した結果、〈もうひとつの実体〉him に chairman という内性が発生している。このとき、〈もうひとつの実体〉は、外形ではなく、その内性を述べているので、chairman は状態詞（「形容詞」）に準じて無冠詞になる（後述の③定着 a. 内性を参照）。この型をとる動態詞には、elect, choose, make などがある。

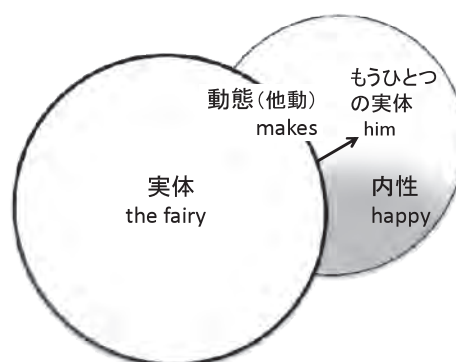
Taro wipes his cheeks clean. ... 〈実体〉Taro の他動 wipes によって結びついた 〈もうひとつの実体〉his cheeks があり、その his cheeks に内性 clean が発生する。

思考の中で 〈もうひとつの実体〉をとりあげ（＝他動し）、その内性を推定するときは、「想定上は」というニュアンスの移行動相詞 to be を入れることがある。この場合、consider や



The fairy kisses Taro.

図8 他動



The fairy makes him happy.

図9 他動（内性型）

think は知覚（既述）に近いともいえる。

Taro *considers* the fairy *[to be] nice*. ... 〈実体〉Taro が、観念的な思考 *considers* によって結びつけた 〈もうひとつの実体〉the fairy があり、その the fairy は内性 *nice* をもつ [のだろう *to be*]。

We *think* Taro *[to be] tired*. ... 〈実体〉we が、観念的な思考 *think* によって結びつけた 〈もうひとつの実体〉Taro があり、その Taro は内性 *tired* をもつ [のだろう *to be*]。

他動の文が外性（既述）をもつことがある。（①存在 a. 外性を参照）

The fairy met Taro *in the forest*. ... 〈実体〉The fairy の他動 *met* Taro は、場所 *in the forest*（外性）をもつ。

It kissed Taro *gently*. ... 〈実体〉It の他動 *kissed* Taro は、外性 *gently*（様態）をもつ。

I drove him *home*. ... 〈実体〉I の他動 *drove* him は、外性 *home*（様態）をもつ。

c. 使役

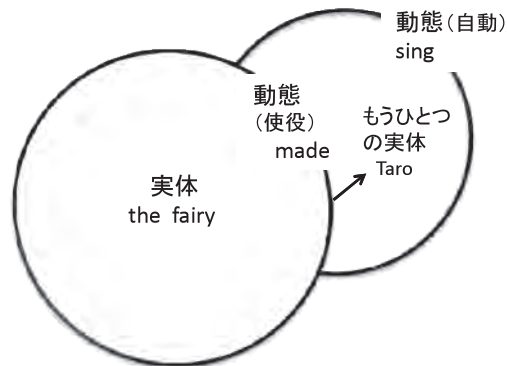
〈実体〉が、その外にある〈もうひとつの実体〉に〈三相・三態〉をもたせるのが使役である。使役は、〈もうひとつの実体〉に対して、自分の意志に従わせることであり、他動の発展である。

英語では、使役を表現する動詞は、*make*, *let*, *have*, *get*, *cause*, *help* など、「使役動詞」と呼ばれる。

〈もうひとつの実体〉を自動（既述）させたり、他動（既述）させたりさせるのが、使役の典型的な例である。使役では、〈もうひとつの実体〉の〈動態〉は無規定動相詞（「*to* なし不定詞」）にする。

The fairy *made* Taro *sing*. ... 〈実体〉The fairy は〈もうひとつの実体〉Taro *sing* という〈自動〉をもつように使役 *made* した。（図 10）

Taro *let* the fairy *play the flute*. ... 〈実体〉Taro は〈もうひとつの実体〉the fairy が *play the flute* という〈他動〉をもつことを放置 *let* した（放置は〈かまわずやらせる〉）ことであり、



The fairy made Taro sing.

図 10 使役

広い意味での使役)。

He *had* his mother *prepare* lunch. ... 〈実体〉 he は 〈もうひとつの実体〉 his mother が *prepare* lunch するようにさせた *had*。

〈もうひとつの実体〉に行わせる内容に、移行動相詞 *to* を用いる場合もある。これは、〈実体〉の動態と、〈もうひとつの動態〉の行為のあいだに〈移行の相〉があることを表す。この種の動詞には、*get*, *cause*, *help* などがある。

Taro *gets* the fairy *to sing* together. ...*to sing* の *to* は、the fairy が *sing* together するまでに説得するなど、〈移行の相〉があることを表す。

He *helps* the fairy [*to*] learn. ...*to* は、the fairy が *learn* するのに時間が必要といった〈移行の相〉を表す。〈移行の相〉がないと認識すれば *to* はなくなる。

③定着

a. 内性

実体の内部に浸透している性質の認識が内性である。内性は、定着の一種である。

内性は、〈状態〉として認識する場合が典型的であり、「形容詞」によって表す。

※ 内性は実体にすでに定着しているから、それじたいは〈動態〉ではない。したがって、この型における〈動態〉認識とは、実体の〈存在〉と、話者の判断（肯定・否定・疑問）という〈動態〉である。

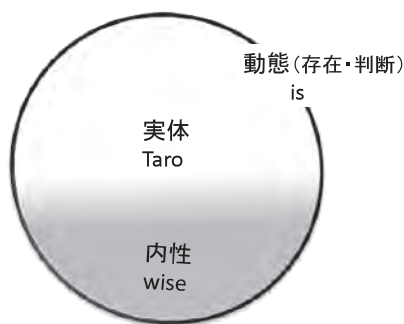
Taro is *wise*. ...wise は、〈実体〉Taro の内性である。is は、Taro の存在と、“Taro is wise.” という内性の命題について、話者による判断の存在（→肯定）を表す。（肯定じたいは、表現がないことで表している。〈ゼロ表現〉）（図 11）

Taro is *not* wise. ... is not は、Taro の存在のほか、“Taro is wise.” という内性の命題について、話者による判断（否定）を表す。

Is Taro wise? ... “Taro is wise.” という内性の命題について、話者が正誤を保留して疑問とした判断を、“Is Taro” という語順（主語の前に判断詞 be, do を置く）が表している。

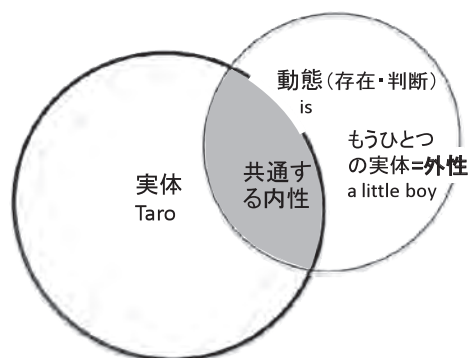
〈もうひとつの実体〉を外性（既述）の位置に置くことによって、〈実体〉の内性を間接的に示唆することがある。内性を形容詞で表現するよりも、このほうがニュアンスが豊かであることから成立した認識の型である。

Taro is *a little boy*. ... 〈実体〉Taro は、〈もうひとつの実体〉a little boy と共通する内性をもつ。a little boy は実体であるから、動態・状態・様態をもち、そのぶん、ニュアンスに富む表現になる。is は、Taro の存在と、命題についての判断の存在（→肯定）を表す。（図 12）



Taro is wise.

図 11 内性（形容詞型）



Taro is a little boy.

図 12 内性（名詞型）

He is *chairman*. ... 〈実体〉 He は、〈もうひとつの実体〉 *chairman* と共通する内性をもつ。*is* は、*he* の存在と、命題についての判断の存在（→肯定）を表す。〈実体〉 *chairman* に冠詞がないのは、内性を表す形容詞と同等とみなしているから。

The fairy was *all ears*. ... 〈実体〉 the fairy は、〈もうひとつの実体〉 *all ears* と共通する内性をもつ。*was* は、the fairy の存在という〈動態〉と、命題についての判断の存在（→肯定）を表す。文意は、「妖精は耳をそばだてていた」。

内性の認識・表現には、*seem*, *appear*, *keep*, *remain*, *lie*, *stand* など、*be* に替わって動態の細かい相を表す動詞も発達している。

The fairy *remained silent*. ...*be* 動詞に替わって、〈そのままの内性にとどまった〉 *remained* という動態の相を表現している。

Taro *seems [to be] wise*. ...Taro *is wise*. というたんなる肯定判断に替わって、〈そう思われる〉 *seems* という、話者の判断の相を表現している。移行動相詞 *to be* があると、Taro と *wise* のあいだの間接性が増す。

b. 保持

〈実体〉の中に、〈もうひとつの実体〉が保持されている。保持は、定着の一種である。

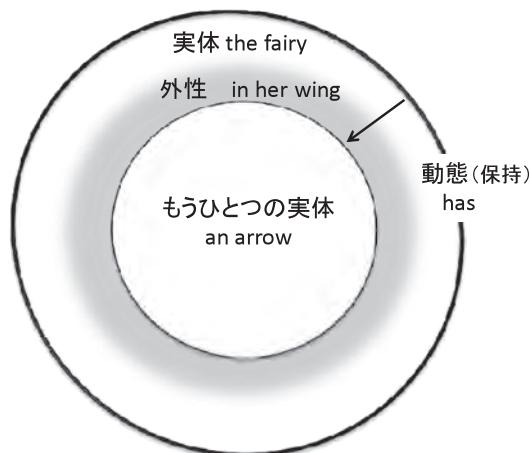
英語では、保持は *have* で表わし、*keep*, *hold* などの相表現もある。

The fairy *has* an arrow in her wing. ... 〈実体〉 the fairy の中に、〈もうひとつの実体〉 an arrow が保持されている。*in her wing* は、an arrow の外性（場所）。(図 13)

c. 授与

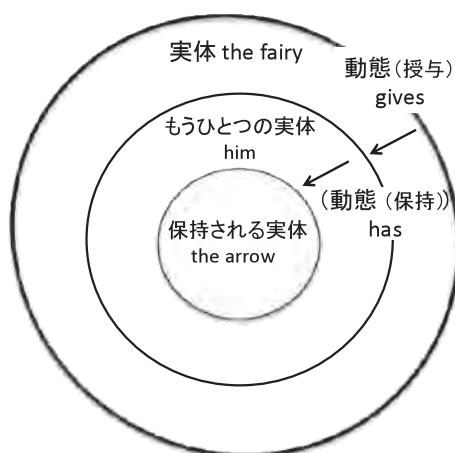
授与は、〈実体〉が、その認識の内部にある〈もうひとつの実体〉に、〈さらにもうひとつの実体を保持させる〉ことである。授与は、保持の発展である。

英語で授与を表現する動詞は、*give*, *show*, *teach*, *offer*, *owe*, *send*, *tell*, *ask*, *write*, *sell*, *pay*, *pass*, *read*, *hand*, *lend*, *buy*, *call*, *save*, *spare*, *cost* など、「授与動詞」と呼ばれる。



The fairy has an arrow in her wing.

図 13 保持



The fairy gives him the arrow.

図 14 授与

〈もうひとつの実体〉がなにかを保持するさいの〈動態〉(典型的には have) は、表現しない。

The fairy *gives him the arrow*. ... 〈実体〉the fairy は、その中の〈もうひとつの実体〉him による the arrow の保持を授与 gives している。

次は、smile が「授与」に活用された例である。

He *smiles the fairy welcome*. ... 〈実体〉he は、その中の〈もうひとつの実体〉the fairy による welcome の保持を微笑で授与 smiles している。

※ 実体によって授与を受ける〈もうひとつの実体〉は、自明なら表現しない場合もある。The fairy gave *the flute*. Taro read *a poem*. これに対して、使役(既述)では、〈もうひとつの実体〉を必ず表現しなければ表現不足となる。

おわりに

以上によって、英語による基本的な実体〈認識の発展の型〉は枚挙され、相互に関連づけられた。

われわれ人間は、対象を〈存在・変化・定着〉の三相を経る実体として把握する。われわれは実体のそれぞれの相を、実体がもつ〈動態・状態・様態〉への展開として認識し、その

認識を表現する。(図 1)

実体の時間的な三つの相（存在・変化・定着）と空間的な三つの態（動態・状態・様態）は、この世の事象の普遍的なあり方であり、したがって、人間の認識の普遍的なあり方である。

英語の「文型」は、こうした人間にとって普遍的な〈認識の型〉によく対応しており、実体（主語）の相をとらえたあとは、その〈動態〉、〈状態〉、〈様態〉の順に表現する。(図 2)

【参考文献】（発行年順）

- 安井稔『英語教育の中の英語学』大修館書店，1973 年。
 Susan Hunston, *Verbs: Patterns and Practice*, Collins COBUILD, 1997.
 影山太郎編著『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店，2001 年。
 中村捷・金子義明編『英語の主要構文』研究社，2002 年。
 井村元道『日本の英語教育 200 年』大修館書店，2003 年。
 安藤貞雄『現代英文法講義』開拓社，2005 年。
 相沢桂子『850 語に魅せられた天才オグデン』北星堂，2007 年。
 安藤貞雄『英語の文型』開拓社，2008 年。
 伊藤英彦「5 文型を再考する」『関東学院大学経済学部教養学会』46 号（2009 年 1 月）所収。
 足立公也・都築雅子編著『学校文法の語らなかった英語構文』勁草書房，2010 年。

(2013 年 4 月 22 日 受理)